

乳幼児期に自然のなかで過ごすことがなぜ大切なのか。

多くの方が、子どもが自然のなかで過ごすことは大切だと思ふことと思います。私もそのとおりだと思います。加え、私たちは、乳幼児期である小さな子どもたちに、自然のなかで過ごすことを大切にしたいと考えています。

まず、子どもの頃から土に親しむことは、理屈ぬきに大切であると、私は考えます。都市に暮らす人には、土に親しむということは日常の暮らしとは少し離れたものになっているかもしれません。ベランダにはプランター、土は培養土を買う、そんな時代です。自然と距離をおきながら、自然を大切だといっても、本当の「かんじん」は伝わらないのです。

そして、いろんな経験をして、自分の好きなことをみつけてほしいということ、自然のなかで遊ぶこともそのひとつ。だから、自然を好きになりなさいということでもなく、もちろん虫やカエルが苦手な子どももいることでしょう。それも良しです。ただ、私は、いっぱい引き出しを用意して、「あさひ」の子どもたちが、自然、生きものとの出会いに、楽しさを持って過ごしていけるはず、という自信はなぜかあります。

その秘訣が何かといえば、それは、「つながりを知る」ことに尽きると思います。生きもののおとをよよく知ることによって仲良くなれるのです。おともだちをつくるのと一緒です。

3歳くらいになると、好奇心いっぱいに体を動かしたり、見聞きしたものをその心いっぱいに受けとめてくれます。「なぜ?」「どうして?」がいっぱいです。そして、それは、偏った見方なく、心で受けとめてくれるのです。

例えば、それは「きもちわるい」とミミズを触れない大人との違いです。大人はもう、ミミズがどういうものかを知っていて、経験からそれを避ける(人もいる)。子どもたちには、初めての経験がたくさん待っています。そこには、大人のマイナスな誘導はNGです。

自然のなかでの体験は、それはそれは刺激的です。それぞれに、自分とは違う存在である、意志をもった生きものたちなのですから。

「私(ワタシ)」ではない誰か(何か)と、たくさん関係を築いてほしいと思います。そして、乳幼児期については、人格形成の基礎作りをする大切な時期であり、重要な記憶は原体験によって育まれるということがあります。

原体験というのは、その人の思想や価値観を形成するためのもととなる体験です。風景=経験や情景がそのまま記憶されることによって形成されるのだそうです。

乳幼児期とかく、小さな子どものうちに、出会う人、出会う風景は、その人のこれからを決める大きなものといえそうです。

私たちが、その「出会う人」のひとりになります。その期待に応えられる存在になれば幸いです。

そして、出会う風景に「自然」があるということ、私たちは子どもたちにメッセージとして伝えたいのです。

自然のなかにいると、なんだかほっとするのはなぜでしょう。人間には、緑と土の DNA が組み込まれているのではないかと思うときがあります。実際のところ、人は、ずっとそうして生きてきました。現代社会は、著しくそれを変えようとしているようにもみえます。

子どもたちの「原体験の風景」。自然がその風景のすべてというわけではないけれど、現代という時代を生きる私たち。豊かで便利な社会。いろいろな問題あれど、こころを広く、自分らしく生きる「風景」への可能性が、確かに此処にあると思うと、なんだか、つづく未来にわくわくもするのです。いのちと出逢う

「いきものってなに？」と3才を迎えた子が私に言いました。言われたのはもう数ヶ月前ですが、その言葉が、ずっと心にのこっています。

ああ、この子にとって、言葉で知ることと目の前で自分が体験していることは、まだつながっていないのだ。

言葉は大切だけど、大切じゃない。なにより、「感じること」なのだ、と再確認するような出来事でした。この子たちが、「いきもの」という概念をいつの日か理解するのに、今という時間がとても大切なのだと思います。

sence of wonder (センス・オブ・ワンダー)「不思議さに目を見張る感性」を、日々の森でのお散歩のなかに。

森のなか、自然のなかでは、人が予期しない「しぜんの」出会いがあります。その多くは、「いのちとの出会い」です。

ダビドサナエが、羽化するところ。セミが死に、アリが集まっているところ。サワガニ母さんが、たくさんの子ガニをおなかに抱えているところ。ヤマカガシが、ツチガエルをくわえているところ。小さなホタルの幼虫が、小さなカワニナを食べているところ。ハンミョウが、ガガンボの幼虫をつかまえたところ。オオアメンボが、コガタコガネグモを食べようとしているところ。

数多の「いのちの出会い」を重ね、子どもたちは「いきもの」をどう理解するのでしょうか。そんな様々な出会いが、きっと、自然と人を分かťことのない感性を育んでくれる。そして、生きものが、生きていのちを紡いでいる今の「しあわせ」を、お散歩の「たのしさ」にかえながら、子どもたちは日々を重ねてゆきます。ヒトもまた、地球というその大きな自然のなかにいる同じ生きもののだということを、今、どれだけの大人が体感として持ちえ、認識していることでしょうか。

私は、今の時代にある様々な社会の歪みの根底には、他(者)を思う傷みへの「想像力の欠落」から生まれている気がしています。つながっていることを体験として知っていることがどれほど大切かと、しみじみ感じます。

雑多であり、調和した自然のなか、人と人とのなかで過ごす日々は、人の在り方(根っこ)を幾度も思い起すような体験になると思います。その時々々の様々な所作を、子どもたちの心のなかに培ってほしいと思います。

こんなひとつひとつのかけがえのない、その時の体験を重ねている子どもたちが、ふと、うらやましくなったりもします。

私が何十年と生きてきて、初めての生きものとの出会いも、3才、4才の頃の経験として、大きくなってゆくのですから。

大人である私は、知識のもとに、その出会いを高めることもできる立場です。私のアタマのなかを通して、子どもたちに伝えられることも多いでしょう。

でも、それは何より、言葉より先の、目でみるもの、五感を通しての体験を持ってこそに他ならないのです。

子どもたち自身の「不思議さに目を見張る感性」が育まれ、そのあとに一緒に思いを巡らせる言葉を持つ、大人でありたいと思います。

生きる基盤となる力を培う幼児期に自然の中で心に響く体験をすることで、子どもたちは自然のすばらしさや厳しさを肌で感じ、自然の循環、命の大切さ、自然と人とのつながりなど、生きる上で大切なことを学んでいきます。